

冊	番	門
二	一	三
四	四	

近江輿地志畧

十四

日	月	年
四	四	一
丙子	甲戌	己未
正月	正月	正月
庚午	辛未	壬午

卷之五十四

弘治元年  
正月  
庚午

蒲生郡

蒲生郡  
古事記曰天澤彦根金蘭稻子祖也云

日知紀天智天皇紀曰八年二月以佑年德自行佑年皇帝  
象乃等男女七百余人遷居近江國蒲生郡五丈武紀曰大  
宝二年三月復徙至濃國多伎郡民七百十口遷近江蒲生  
生熟之言蒲生也而獨生野也而廣之郊野也日知紀玉蒲  
野經篇之事也取以名其邑也天皇高生御源流日本  
賴國の王の心と被を氣りて蒲生野也。布之経不取乎之名  
附之又トヒ耶有甲室御食事には伊豫國鬼多多水當

村を限り北は津守町の西山麓、東は伊勢山長谷寺宗  
至り西は野洲町界、南は濃山、瀬山、木檍に接し、地勢高長  
りて北緯一〇〇度より度より坤と艮と間窄迫也

通保郷、洋山野洲町界、新久

山西村、西野村は山西村、野洲町界、木檍村より移  
らく皮山西、榮仁保村より、仁保の字より

牧村、山西村の西北より村より

東中小路村、牧村の東より

西中小路村、東中小路村より

田中村、西中小路村より、野洲の郡界より

大日堂、田中村より、仰毛川河、事と御、人傍不観日

ト西赤土月山ぬや下廻、三高れ九重の之屋、西山、西山、閑谷  
田中氏の高祖墓あり、是大日堂を教昌院内ニ立焉

八幡社、因里内より

蓮池、乃大日堂高祖の裏内より、四間四方、深より池半無  
蓮也、中茎二花及三花生より、木檍より左基寺也、古傳傳云  
天竺楞伽復流のめもより知れ、蓮也、又、寝旦、四小引より、  
弘法大師入室、其先を解て、細経は後、此池半抄也、又  
又曰、三浦より雷を降す地名及産種等、と云に極なり

錦明天王紀三十一年秋七月瑞蓮生於祖池一茎二元三云

銀池の内に園子有る其一草花一花を以て名づけ之  
ありと美し又雙重蓮花也蓮花有り小池は宋仁宗皇帝之御  
中之樂游苑花の天泉池小圓粹の蓮花也小池は宋仁宗皇帝之御  
州之御湖小蓮花也蓮花有り起居院は御所也御  
大成殿は並殿蓮花也御蜀の中全銷避障花池  
の中蓮一茎を擇て上も下も兩岐あると二重の花  
を云ふ左平素事の秋也先を圓鏡より御池に  
あかがへんと大手拂度すと  
西牛村 田中村に北より  
石龜角尾村 空村 有り近處多き種也ふ西園  
の銀池の事を氣さず其置せり  
池田村 木田村に東より  
森尾村 池田村の北より  
古ノ村 木田村の南より  
鼻中村 西ノ村の北より  
木田村 仁保村に東より  
大房村 鼻中村の西北より  
仁保村 西源活村に東より  
宇津多村 仁保村に北より  
ち田村 仁保村に北より

中村

町田村の北から

西光寺 中村から毫庵先生書院西光寺より、津ちふ  
海東智忍院の書寺より用賀より上へ國主在極院住長立霧  
負安佐経州西光寺避難が近いは長政と西光寺を建て  
始り安佐飯太左衛門田中少郎達至天正七年十月八日釣  
崎同八年夏月九月波瀬山後天正十一年西成寺尼秀  
次八幡山小倉多喜、安佐ノ町をまく引遷寺、あつて  
今はも地より岡山負安姓は平氏北條相馬三國連泊往來  
守護故のゆえ負安姓あるか孫久行長乃南也と國泰寺  
中正義町院天正三年勅敎所に徳旨を物へ後跡院院天

五十八年七月二日亦勅敎所の徳旨を物へ天正九年二月  
二百石雪院の勅敎と如く三頃大雪院の事まで至りて中三  
天宗西光寺の移家、安井郷川室の御筆也あらわゆる  
坐像長丈天宗佛工喜日作もア後光の内小太光佛と云  
佛事より脇立觀る跡至ニテ蓋薩摩傳多ニテ又其外封  
事一寺領十八石世人安立寺の寺として立場をさ  
焉奈寺あり、豈云海藏院ア洋ふ海藏院の條下小  
町ノ南寺安立寺うち天正七年己卯五月廿四の日  
靈參をさつて淨められ僧南木小弟と徳江寺を法  
事日甚に高れ度教紹智大徳院内徳如院ほのを(あす名高)

を江戸に歸り、江戸を裏面する所より、うふと其上貞安  
瀬の日湯ふ岡義とすふうとあふや

林村 中村の北あゆ

東漸寺 林村から慧光山東漸寺と号し、法事林  
四寺のま守る。速源延和尚の開基あり。初は觀音像  
は上多本の木版刻あり。漸寺は三多本書ひ様額  
ゆき葉葉僧高泉力筆あり。般若塔一ヶ鐘寺阿彌  
樓寺也。

宇摩尼村 林村の西あゆ

八幡社 今瀬名村から石保相傳寶弘二年八幡又宇

佐 佐は禪林松ふ鎧座す。因く其ねを影响せね  
や。小佐是日欲祐之失セト。移ふ其跡より祐之を建去  
今は八幡山へ勅清奉。以ての事より少祐と建  
は又佐度也。

市井村 今瀬名村北也。

八幡町 一左房村地也。北は北幡と号す。市は八幡  
官鎮在の事。小佐また得ふ八幡多條下小出久太郎と稱く。據  
右は此地の產うも而色ふ隔て。此地凡名慶安事  
數帳は此地の產うも而色ふ隔て。此地凡名慶安事  
具小佐產門小糸从農兵秀次始地主領。左房は北房と號す。

賈故人多々百工隸を並べ小秀次東門山邊と後日  
表瀬小乃ア然モト鎧家は續くゆきら一町數字三町  
有此町数字下の町邊の多ノ故少安の因め此の  
小口より三町綱毛三丁鎧毛毛一丁慈恩町三町瀬海多町  
二丁新屋町一丁方々町一丁葉原町一丁生糸町一丁船町一丁  
猪絶町一丁江島町一丁馬喰町ニ丁水原町三丁玉前町一丁  
西原町一丁本多町一丁仲多町一丁相の町一丁高町三丁  
梅原町一丁多氣町一丁多氣町三町五社町一丁新町三町  
小幡町四丁あ印多丁石浦町一丁池田町一丁寺内之字  
猪平次町ニ丁此地源氏之隱一主八幡の藩肆と云ふ也

四、富子の如一佐久間丁丁日暮一丁洋小國小出

八幡社、八幡町下乃ア大松丁小鳥居乃一の場を鋪  
馬場長サ百歩移間幅丈八間所ア八幡の社地界内東西八十  
丈南北九十三間山林長サ二百間幅八千間寄附ち松三  
間舞殿三間半四面樓門二間半三間半御堂所二間丈八間  
石一間半四面移移三間六間鳥居後四間うちテ六面  
額所ア三額八幡主此三字も書ん持明院の筆也  
史以萬社鷲座也義は一條院の席宇室弘二ノ已第法  
在焉ノ年伐記主義人祐信善門原也曰八幡又為一條

院の宮ノ社ニムニ年ニ影向レテモ弘法僧傳記旦懶院  
の宮ノ社ニムニ年ニ影向レテモ弘法僧傳記旦懶院  
は也ふ今ふくらむ事無春ね葉を民子記。蓋ひ遠  
國より其後比年紀山ニ多様を教えと上元節より  
山下ふ弘功皇后玉依姫をもつて天正十年壬午  
豊長秀次は山を陽也と因み上丸社を改く山下も  
ちりてれ給一社を今既に社也と余れ毎年四月  
卯日より年の日よりまで四日を御事ししれわ氏  
の數十人粗ねとあ立碑を廻。もと仰げ松塚と云年の  
日は御輿を仰げ多きの禮物を仰ぐ。又弘法僧傳記所謂

岩戸社ニアヘテす是丈大明神ニアヘテ守而至社主守  
大鷦而大鷦社アヘテす牛頭天王社ニアヘテ四方以上ア正  
諸主松山河内守諸主名大和守社僧普門院等祭事  
少額の社領佛業アヘテ十四石三斗余

大歟院君より始く危引ク。普門院の祀曰。八幡主。大迦  
藍沫天皇弘功皇后玉依姫より本地は沐院銀音勢  
至也。もと普門院。天糸山の寺寺より。後參雲慶安  
寺。拂才天社等則普門院の恩内す。

日松山。八幡町の西あり。真木八幡町の後す。さる  
サル所。洋直亨。拂才天社。二十町拂乃。

願成院寺

日枝山小野 日枝山普門院願成院寺と

号ひの山の幡山西面の方みゆきを天正年中秀次惣左  
衛門をもてて舊銅村より遷り其後亦多小遷え縁起  
曰推古天皇二十七年五月上言太子御年四十八蒙勅治  
の國內小四十八角寺を建立すを終後少安く比寺と開  
基有ノ故小預坂院寺と号せる本尊十一面觀音坐像  
白樺聖德太子の他序長三尺泄古一山五十五步五尋  
領丈四十五石も乃じふ織田信長比叡山貢人時當寺も  
入滅しゝうふ甚恐のをほん今八幡の私僧衆常々  
日枝山高殿十八間二尺五寸十二間七畝十一步同松中山

百六間一尺五寸間一町七尺六畝二十八步同高殿七十間四  
尺三寸四尺八畝十七步

蓮徑寺 十一日松山城禁除年次町のみゆき妙法山蓮華  
経寺 妙傳寺の末寺なり 正永以降年草創修  
改本渾正定額建三間裏圓教院曰意此甲斐國仰延  
山久遠寺の土一組あり此寺天正五年己酉春安らへ遷る  
十四年丙戌の夏安らむち民家此地小約。則新町み於  
く南寺を営み延は因十八年庚午の春秀次落成の  
日南寺亦京於小退く事凡四年無後寛永六年己酉  
年而正室あれ古寺へ之を以て時を暮れゆる處に寺

政一ふ清く不正経ふ今れ地小一寺を建つるをかう

阿対院

蓮經寺也南東ふ山金月山立日寺洞

覺院と号ひ淨ちふ安云淨義院の事す淨義院之  
内小二院焉均誓願院と云書陽院と云誓願院の  
僧一寺を建三丁也寺ノ子をかく慈恩寺と稱ひ  
慈恩寺は淨義院の寺子也天平四年也す  
今之地也前其時住獨暢蓮法門寺也金和尙  
里内東西十間南北九十丈間也寺の本尊阿彌陀座  
像長二尺半引佛也内佛阿彌陀三像也三人安河  
海氏但教迦如本寺像二尺八寸同俗地蕊蓋薩摩石佛弘

法大師の化因一師聖德太子の化も一狀矣也う移  
祐也豈良秀以れ息女正寿院利貞童妻喜悅の爲  
地と嘉附也。今此寺紀もか

西立寺也因松山下蓮經寺也僧少也易紀曰漢  
海國歸生郡立蓮經縣比年紀山西方寺妙寺也推  
古天皇三十七年己卯春正月上京太子<sup>時早</sup>奉詔  
廵狩畿内詣國到于濱海國遍觀此山<sup>比年紀或時</sup>也  
み色彩空也子怪而名也遂到蹕至山林曰般若八  
葉蓮華光法陀羅銀音淨刹也世人皆不之乃是妙  
そ預る資達臣物都寺也冥福欲建於此地精舍

是年春三月奏聞而立四箇寺即阿波寺阿波泡寺其一  
也 古云阿波泡寺最明寺乃累改之西寺太守太守曰三百餘  
也 淡海固有古美地十二箇名具隨一也

署之後南有西方教主多遜云一條院而宇竟弘武成  
申夏五月八日八幡大菩薩影向斯地而地阿波祀佛也  
誠聖若不惑焉可仰可信哉是乃擁護佛法也自尔  
乃降人皇八十七代實元天皇後孫召那寺乃現而二世  
勅於所而建長奉度淹流經天下罹其災死者多  
眾明寺通多舊國御脚之乃其行念賜源陀子像故  
春日御剎今多像也譬如故多津名十三箇村民但会被  
佛像取最明寺云佛耳度淹難歇村更以汎公官故自與正寺今佛光  
寺也

于時天下之稱獨創也

与源陀子像惠心僧

十三軸並觀也

利益和瀆 親舊上

人製他

於村民會八幡又拜般彌之圓含佛

今大國村長者世傳源陀益治村

之多月八日即八幡事月也六月三十日而被奉正中日行之西寺

而月十八日乃度淹止矣現世利益顯顯無矣以時乃與

于今不退持

乃度淹止矣現世利益顯顯無矣以時乃與

於南村時八幡又酒賀舍佛母寺

左六人

佛多高滿其村麥

諸樂皆復曰多念佛言源陀承志七年一光之時有致

史原紙而後立念佛天而年中因秀次久游源新十六

為他寺可稱與允祐十四年辛巳亥移寺於金北山下

而爲佛光寺江第一場也

俗云佛光寺即源陀寺也

義善薩一軀

御剎者太守寺

上所舉四箇

王本草也自古地

古至今有十三箇村民今八幡宮多ふ眞之時有馬場村造  
小舟本村添東氏西方寺門人也所事故廟本真宗も是場也  
故五村今八幡有馬場村田地也

### 金臺寺

寺内町から寺僧の筆記曰毎節度來

本領寺の寺より元十二代顯如上人益圓彌生節度建  
立る其教化于今俗地より其後幾回信長甚云山  
少僧を募り毎節度を云ふ前後甚に其後元和元  
年のは秀次公八幡山少僧と築くの日節度もは寺小  
うす境内町河今節度も多群人来朝の爲  
は必施給もあらゆる金臺寺もも傳代く留まらず相  
跡ふ故有く正徳四年の年より本院あらうるは僧

弟も轉為少つてむ節度十二間半四方本尊阿彌陀  
佛坐阿彌陀坐

正業寺 京衝をより巨高山正業寺は久く済宗  
安云淨教院の末寺も開山空譽祐存本尊阿彌陀  
立像長三尺智音勢至長一尺七寸春日化くは寺  
號り號り天正年中今之地也

近江輿地志畧卷之五十五

蒲生郡夷二

連照寺

玉の本町山頂寺也曰近江縣蒲生郡八幡山

連照寺はあやめの本院也初在本郡莊色而不知  
何人乞草創經數春秋矣唐長中遷諸八幡山下而後  
多矣中弔四世沮軟乃因奉本山余而鹽亭以寺矣  
道因者族姓攝津人知行兼備教戒尤至故自旁  
來学者甚多焉以故本山沮泥大上人責其功德而  
許通因得法孫世く相繼監宇比寺焉蓋今所存  
文產寺則多文中本郡之令小庭仁翁所依道因傳

朝迄而所居後淡焉也云

善住寺

小幡町より一向宗錦織寺の外院より

奈僧相傳閑基不詳始つてかより天正十四酉戌年移  
地小移りかよる御沙泡庵像長聖人孚惠公の仰る

室徳寺

前町二町目より如志端山界池院を移

寺と号す御沙泡庵の仰る御沙泡庵像長聖人孚惠公の仰る

寺より門跡に閑山傾蓮弘西蕃貢源大和尚かよる河

源治府像長三子

西福寺

東側石窟御沙泡庵智恩院の主寺

あり雪照山玉金院正福寺と云ひ寺紀曰江弱浦郡

光明山玉金院正福寺は從古園國安云本町少佐く  
徳田信長公の御座建立閑山安云と御湯の元始覺蓮法  
灵巖上人玉金院福向より上人公先へ上州少佐の慶某  
しく其圓光也正福寺ふと名後久遠延至多を慕ひ安云  
少佐西福寺ふと名後久遠延至多を慕ひ安云  
少佐間本尊阿弥陀庵像春日の仰りすと名益多く  
願故寺 博房町より加納山方德院願故寺と名  
い演云と京智恩院の主寺より天正十四酉戌年開  
基泰蓮法實鑒圭山和尚本尊阿彌陀三子惠公の仰  
順應寺 大工町より一向宗ああ復寺のままで

初は彦清寺と号す北の名村也天文のは亂彷へ  
引後久多實材小通場河と其道を天正年中少八幡  
町今地移至寛永十一年始く順龜もよ事より  
細江 端幅十間河湖也場面立八幡山  
城の時外城也今は商賈船の通路とあるひ  
橋ととも橋とももちのほの其處小河と清四郎橋と  
少<sup>アヒ</sup>町筋<sup>アヒ</sup>其河ふりを本町也<sup>アヒ</sup>本町其次大字を  
多の橋とももハ高木<sup>アヒ</sup>其次よりと青金橋<sup>アヒ</sup>青葉町  
井の橋の事<sup>アヒ</sup>保正圓<sup>アヒ</sup>河も津國の入にまかひ古秋  
井浦也<sup>アヒ</sup>物語もく云臣櫻<sup>アヒ</sup>枝<sup>アヒ</sup>反那<sup>アヒ</sup>事<sup>アヒ</sup>場  
人物門ふ也人

細川義孝

水屋の山の入にもうも辞く國も墨玉春風吹  
其處は處處云六角兩面の家小すもひ和懶の上すく讀字主  
八幡山　八幡山の西山あり山すく深小國小治以一比年  
弘山と号し又法華峯共すうち後は八幡宮法華の所也至  
多く真宗八幡と謂す其もサ凡て二三十間许八幡町  
の山面五百十間、百間舟木山の面三百五十八間、半間  
島津田村の山面七十三間、百二十間北佐村の面三百又  
十間、百間（もろ）

石動水　篠山東の方中程由弘法大師作成石動咽王  
宗照了翁河其下名水也又曰石動坂上

古漢記

則舊文原上

秀次築くよみ本丸ニミの郭埋門石垣等石抜今あり  
八幡町の船入門は其時元湯原と名様等の名今存  
在し秀次を迎へて納言よもじ破る)

皇清詩

鴻臚書院

（左）飯田信長が之に因りて今の大蔵院の始祖也。

國の事の居まざむ

船本郷 船本村多賀村南隣田村奥野村等(もと)も  
船本村 公儀の西少しき村う日松山の舟本村の内多  
とも混雜する故小字有るかせう

蒙済寺 同村から玉光山より人済をふ母ち済教院の  
まゆる本尊阿弥陀主像長三尺二寸半至徳太るの化す  
駒士親旨勢至三像惠の化す多財天弘法大師能  
みし白治三年庚午玉蓮法皇坐西阿和尚の岡基より  
青根天神社 母本村の北より比年れ山青根大師  
より之は母本の天池あるにハ橋のあらむ天池え  
の祐傳を香梅寺と云記曰人王六半古代一條院即  
ち宣弘二百年青根長者の建立所坐高五丈相の  
丈也能作苦公東芳のあ像覆紹吉祥天女ひ灌法  
矣れ毎年二月一日五月より

香梅寺 青根天神の祐傳よりゆる阿弥陀如来  
聖德太子の化す寺は今山門の本派す  
本地去 わ尊士面觀音傳教大師の化す外高天王を萬  
達摩堂 蓋ゆか十三年送立本尊石勸明王智覺大師の  
化す別小大日如來も深明王思惟門天を安坐  
思惟門堂 傳教大師の化す妙見門ゆく青根長  
者の子復祐ありと云

香梅寺墨免日系永の西暦年九月五日移立再造是傳持  
天台山楞嚴坊僧般若智遍是時延昌寺三院内一院也  
而本二十八年從懷弘大師若至寧南和年正月十二日轉

後於此役奉乃天子安全者也天正十八年法曰湯天正  
二十一年十月五日法政遣三別御天台沙門財林坊  
法衆人王而八代後陽城院鶴谷院<sub>天跡室等</sub><sub>高級初之</sub>齋長三年  
五月乃命日從台裏坊内御除地二町<sub>西友士畠</sub>因三年祐領  
玄石七斗九升<sub>官金西川家房</sub><sub>別高大智坊</sub>實以十三年復被委<sub>御</sub>  
主相間法政及破壞正保車中烹眼大師熱面<sub>見燒</sub>燒  
買蓋法下弟子法下山秀三烹眼大師<sub>御</sub>從事於湯總  
來住于齒隨<sub>多喜</sub>改主歛院實以十二年寺遂立延室  
六年十一月乃命法政曰遂立拜及鑄造石鳥居本地墓  
氏子四箇村<sub>船本小舟本</sub><sub>船有八本</sub>塔內法華山額西面尾<sub>從八幡町西</sub><sub>乳三町余</sub>

秀次云佛院内二丸下園籠立天守臺下景致西湖水  
比良山前水甚深<sub>淡海云之曰</sub><sub>附其筆</sub>澤國細江北長倉守松

ヶ治東、公橋町南、後山之上山自正保車中至秀保車  
中門下山秀山盛山厚義山師資相続八十余年山  
舊山厚祐改東院惠運三季保六奉青蓮院二品モ祐親  
親王降賜色衣令旨玄保六奉青蓮院二品モ祐親  
王降賜三緒袈裟令旨<sub>上</sub>云

富振 青根天神社の六町あるに青根長者の名  
敷跡と考へ古傳古昔青根長者天神を勧  
請一奉<sub>上</sub>目自<sub>上</sub>誓<sub>上</sub>曰此下多日<sub>上</sub>久々夕日<sub>上</sub>下小

尼や。古昔大蛇が凡棲止らん。はまもゆべ。柏の  
長者及數寳親王へ御事を繰て。相あひ。つゞく  
柏の長者。名者傳紀石洋。南國金縛守柏以降の  
回記を考へ。翁人全あり。代傍承天皇。は遠かなる者  
とぞ。亦數寳親王。人皇五千九代。多々天皇。翁の  
皇ふる。是を多く。塵特世の相違。多聞せ。を知る  
べ。亦柏の長者。とぞ。始代お續。くわづ。者也。  
と書く。回記。及。後先の。遺聞。を。搜求。も。た。事。て。知る。一  
本。彼蛇の。白眼。を。射。る。も。仰。て。本。鷹。四目。法。を。多く。家  
経。く。事。と。あす。多。よ。一。彼蛇の。眼。か。く。實。小。兩。眼。の。

少く。其眼先の。ゆ。小。核。二。回眼。少く。ある。ま。ほ。毛。留。四  
目の。よ。白。口。内。に。く。若。佐。ホ。氏。蛇。の。目。を。留。め。と。見。る。よ。み  
り。正。其。現。ゆ。る。も。仰。て。ア。ル。を。決。ト。モ。ア。ト。在。佐。又。云。世。將  
蛇。を。射。る。の。矢。を。湯。世。四。目。と。考。一。多。数。四。目。と。主。陳  
多。鷹。あ。本。鷹。四。目。漏。の。ク。白。口。卷。あ。も。ズ。代。ハ。目。の。漏。也。起  
て。何。そ。世。將。み。跡。く。や。又。又。か。ふ。四。目。の。絞。日。蛇。眼。の。四  
の。漏。う。古。老。云。佐。本。の。絞。日。蛇。眼。の。四。目。絞。は。本。多。傳。も。目。絞  
も。う。ア。原。の。子。く。く。の。多。形。也。と。佐。ホ。の。絞。日。蛇。眼。の。四

ト本氏裔湯主忌湯イ日始ニテ後事藏乃四方目  
テニシテ御ハ佑ミテ源三秀義ミテ也宇多天皇景臺  
ニ歎美歌王ニシテ左大臣雅信トモア雅信參議狀願  
セシム恤義成願トモア御射御國慶生於佑  
本御ヨリセシム始ニ佑ミ本氏ニ寄リ此日より  
秀義ニムセシムは五代の源かく歎美歌王ニシテ九代  
の御ニシテ其秀義の御風を經テ御御四百  
を致セシム有旨は奇彼蛇の回眼を表シテ四百  
ノ御湯左琴傳也佑ミ本氏湯は佑ミ本ニ二十四世  
猶源左禪主實之深シ御御佑ミ本の御奉納也

御御実源也臣本多忠見佑ミ本主明少同少蛇の目  
の事は曾々御くあき事ありと云ア先御被傳シテ  
直祖祐祐源金鷲の傳也佑ミ本御御之御也  
之を高シテ御御直祖神也

奥源祐也山奥源向歌王原北原守義多村を云ア  
奥源村也のえ村西北山地縦ニテ源也源沼有  
て間隔ノ北の原ノ際あれ地縦ニテ源也源沼有  
後りテは更に事人山源也山共仙行山共仙石山古  
今仙至山山下住ヒテ云里源も生年少小怪也トソ  
瑞氏は事ノ臣石野毛を序書テ御御大云後ノ氣事也

凡ての爲め御金を以て月給清けむとぞ

臣様よりは奥浦へて清正事小姓へ渡の爲れ  
事へと圓々御大朝から候の源小進が死ぬ

王の源村 也奥浦の中より別居を便云古方帷喬  
親王の也小室もす御所のやへて天武天主  
あると云上あをす也と其事あらばおじづを傳聞と  
おそれる御事無年十一月もとを極理と申せられ  
佳例ありまく臣様より是を承て所載に例貢又郁  
ある云ゆる蓋ひく也あつて例貢と共今は多く  
廢すと云ひ郁るのとぞちかひ事と事とはゆる年

とくとく郁る二十三年よりとて二十九年もしゆる  
則奥浦村のち金は事あが。 桜庭より鳥目賈文  
を下りて楊木彦根守主の領ある小川 井伊氏より郁子  
の御茶一石五斗をまとも田より郁るを仰ぎ田の事  
祥小ち度門より御事書曰昔源氏は天皇御子とて  
又後へ三年而止住ちたは花を徳浦と云月の下の傍  
齋と云ふ人多弟をそなへは傍を徳浦と云月の下の傍  
五年の王の後の弘和と云は奥浦ゆべに武家を御と云  
侍多を云ふある三名在園記ふありと云長乳玉藏へ  
月下暁同と事監義記すもかれ左信用一か

在山村 奥佐村の北より

白糸村 在山村の北より

元富士 奥佐の北より経行山に向ふ有木ちず村  
より大槻一町半許西より左石を頂上より二三間下右石  
盤石ありうち五々六七基上の方ね二や三小石も傍  
はれり。此と接続する有木村理新向の地と云ふ  
は山先涌出と無後流河國守まで有木村を元  
里手より瀧間山と云ふ。

経行山 元富士の向ふより直立三里間詳細く  
見き山あり大木松草を多く多草を経行山と云ふ

石事は数年飢饉」といふ人云へばゆふ入る事無く薪根  
事をやさん故あ名稱

伊崎不動堂

経行山北の後まわる御舞あれ伊  
崎ともうやまひは伊崎耶ゆきまは北向すも

不動祠至聖德太子の化あり外の櫛の傍に黒の像  
傳ふ聖德太子の化あり又奈良宇石亦鬼の像也  
付物と云経行山より一里ほど有つて峯の中二里経行  
ければ天王山あり山地小樽を多く有事山の峰より松  
の帆柱のやくをく長十間余の木を楊を終く馬込へ  
そく本のまほ斜小棚中へつまむるる參道の者所望ま

多事ゆきはち人情を食くればまことに本のまゝ  
湖中へ入へ水守とてよしと廻の猿あつらふと傳わ  
の術と云所謂都盧の體より棹船のあすきり後  
幻名本鬼法鬼の影傍け

北津田村 奥治村のあ東西より

北津田村のあ東西より

近に奥地を畠巻くあ平云

美濃郡第三

中久村 北津田村の西面より

長命寺

長命寺の山中久村の西面より長命寺

高木宿町東方八町外より長命寺山より長命寺村

を云ひ深山ありちま七八間向ある垂頭寺三

丈五尺あるの似たり伊勢耶山長命寺と号ひ西内大

臣の山也獨りと云ひ或伊祁耶山又嫌稱金山より。是九

月の天台宗相傳觀音菩薩創の日尼は事也。而後

僧尼相共と云ひかかね二十年後以降とて尼

毘沙門天縁記曰 ある日 お西國から行方不明にな  
る。般若世音菩薩は山長尼寺に詣でて、要法事の所聞甚だ  
驚いた。玉ひは妙徳金山の御自作より、中身ちるが國泰  
光明を以て事無事夷へてちるを事す。御堂より一株の木あつて  
我が其あふ般若世音菩薩の種あるから。其下ふ寺尼長  
泰所御飯碗の大きさも御祥ありとぞ。かどひらひ  
奥本を以て御見るのそ像を塑びらんはよぶ能利塑  
造主。多喜せんともぞ。大富易小力を下さん。甚恐  
遠まし。

きくよきやくしんに重なるが如き。もう御不思議や虚空  
より妙色所れ御飯碗田滿と僧一色と圓満とぞ。奇矣  
の事ひ。ゆく般若世音菩薩。よく御是あとあくひう。十面  
觀音金剛のそ像を創すをもとより時當山澤布。古  
より光明かくもき。子八分のそ般若世音菩薩のそ像。ひ  
ふね士産加藍と医氣。彼もそをもとまふ。あ  
そ今世まもはわざを十二面のそ觀音三尊一佛と舞

奉。御ふ石室のうち像も曾有のた陽う。昌黎人王  
辛九代天智天皇の御子御國あつて御子御子御子御  
終御爲御子御子御子御子御子御子御子御子御子御  
自御枝の楊柳を毛利と御の儀ふさとせらひて、招  
うりは候。名前御れせんとあはば以柳の枝ふ奇蹟を  
見てあてゆく氣をとひし丹波うつし三ノ木ふ石室  
少柳の枝一枝ふ大本うり翠葉柳ふひりうどり天皇御  
御子の楊柳を參るうらへ是より長倉守まえ下泰平の  
御行所と申す。中房人皇太子代花山院御瀧也御  
ゆき。法樹庭の御所と申す。中房御歎き深く之を時

聖華經を巻懐せりや妻の陳宣及王仕陽等経持  
不屈有もつて文小助と忽喜れの席へと起る也絶い跡  
鬱園をめぐらす也多ひ花山と寺山とすもく中興廟の席  
姿とみゆき入り入見は早朝より奉つき佛に修持の為  
とく絶効般智ゆき濃品是波音く三千三所觀のもの  
是場と巡りまやリ第三十一焉あるべく南子が院まや  
あさをれ御ふく柳大智帝のことを云ひ、楊柳の枝葉  
ちよづくをとむるを爲せやうとすまや其の身を改めを  
かうや御修持の席ありもまづあるやうもく今世  
やうく嘆れ者の間す。希少八坐や柳ももく令すハシ

先のかきくらぶさんくうつよもちのハモの文と天智天  
皇の楊柳の目縁とを取て承りて天智天王即再兵の  
御室を相手に御坐は佛壇丹青の處を葬  
生ノ墓多モ詔を塞テモ穴又小石もんじふ南園  
野洲郡仁保村小村智行移ニテ沙門院中名園郡小  
田の沙門ふ多義<sup>ト</sup>心堅因佛は無量の如來を祀  
セキモリ其故に夢かゆき所を遷して黒川南園長  
令寺を再興して之は二世の所を志<sup>メ</sup>因滿也  
アトシム小祠をあつて是れの山浦久久寺  
荀寺があるほく有漏の極<sup>ム</sup>を誓く効年<sup>ト</sup>は行の

終身<sup>ム</sup>を守<sup>ム</sup>と終<sup>ム</sup>其儀のすみれ<sup>ム</sup>と身<sup>ム</sup>も裏  
佐<sup>ム</sup>本多氏秀家は政実親王八世の序孫也名覺  
年八月伊豆國住人島山進士助左衛門秀穂<sup>ト</sup>入  
名<sup>ト</sup>うる<sup>ム</sup>ある年家<sup>ム</sup>の事方<sup>ト</sup>、源氏<sup>ト</sup>背<sup>ム</sup>秀穂<sup>ト</sup>入  
秀義<sup>ト</sup>領<sup>ム</sup>其<sup>ム</sup>の<sup>ム</sup>と<sup>ム</sup>秀穂<sup>ト</sup>の<sup>ム</sup>獨<sup>ム</sup>男<sup>ム</sup>と<sup>ム</sup>得<sup>ム</sup>少<sup>ム</sup>君<sup>ム</sup>  
妻<sup>ム</sup>を幼<sup>ム</sup>御迎<sup>ム</sup>其<sup>ム</sup>の<sup>ム</sup>と<sup>ム</sup>秀穂<sup>ト</sup>の<sup>ム</sup>獨<sup>ム</sup>男<sup>ム</sup>と<sup>ム</sup>得<sup>ム</sup>少<sup>ム</sup>君<sup>ム</sup>  
楊二王門コナ金<sup>ム</sup>の<sup>ム</sup>傳<sup>ム</sup>房<sup>ム</sup>と<sup>ム</sup>（邊<sup>ト</sup>あひ<sup>ト</sup>）時<sup>ト</sup>  
天台座主の<sup>ム</sup>瑞<sup>ム</sup>院<sup>ム</sup>御<sup>ム</sup>は下<sup>ト</sup>を<sup>ム</sup>中<sup>ム</sup>鳥<sup>ム</sup>山<sup>ム</sup>也

晨々の清経誦乞乞傍かうじ左ノ将を御身ノ秀義  
の像を書き空縁拂ふ下する空縁其法のゆゑと仰  
南寺ふ納ク秀義至長命寺歎勵大寺天岳崇福大居  
十之種ト南國ち乃取之在南井取十又二所を寄附  
あく寺外ノ中島十四代佐木尾澤守氏於廻世セ  
刻中島南寺ふ多義セふ是義と並シ無義のまゝ并  
長吏桂園院室は下のさせる汗華院一院と云  
化の銅龕とうち了名板とを納ム中島七畫伽藍罕  
室圓所の傳寫志と作書をかへテ中島大永六年震  
六月十四日山門の多義肉體を供奉トハ文と南寺ふ贈

らひある食事には天智天皇の御所山門西院の別院  
あり御所主を有シ西院の多義連署の卦明白シ  
寛正報院院元寛正年癸酉六月南國多義の御室  
甲斐守織田信長公の御子也其弟次少佐と伽藍傳  
舍弟を以て號を承せテ天正十年奉一山の信傳号と瑞人  
小角を以て號を承る也之をも下界報音長安天  
國基昌曰に勅諭生下郡長命寺者人皇ニテ四代推古天  
皇二十七年正月をもて建也かなるを報音長安天  
文及天寶音御内大臣の教也より報音長安天

金龜山長余寺は又は北野寺と号ひ難事で回済す  
の建立より満井備水寺と號すと云ふ也て回済寺  
名たわざる觀世音はあら池水をもとと有或說曰往古佛丈  
もしくと甚淺汎は大師か又迦藍の住り事と雖云  
自古より大師の像を遙くあると云ひ故日金龜山北野ち  
と云セヨ其後高生長倉の建立ゆゑ長倉寺と改ム  
ア中房又高生院へありテ下而東渡院庵森大師小  
向く云中房は柳樹一株れ柳樹を乞う木也テ常小光明  
乃りゆゑよ新樹を切く親自在菩薩の像と遙里智  
か縫ぢんは翁家家わあやヨ甚うと信す云。革日

極く壽命長なる人和氣とは潮水不平不吉白蛇也日  
和事もと多くかき消へ如くあらア太郎原うちと申通  
遍ゆ所多く多す被楊柳樹多く長老の觀世音を一刀  
うちぬくと化アラア乞う長命の事像をと云  
臣橘子と申す南寺西門た辰のあひゆとも況ち恐れ  
國同左官日人皇士二代景弘天皇十六年山本主に法天  
皇の七八八年中堯也ト傳はる者多也と云く其傳多シト奇也  
伏見御天皇の御令あら云く其傳多シト奇也傳  
記少所載の圓了垂露をもの用意するト後葉わお源事  
は後紀源氏ノ長ノ基草玉源の事多シ夢中界ノ甚要

を取て祀に厚く、是物記小長倉守と金龜山北野  
ト多一高主長命の再建主役小長原守改之と漢傳  
タラ金龜山は古上野今之彦根城の事とひよと金龜山  
タラ事は活潑彦根守降候の事とひよと金龜山  
其事は渾小彦根守トカム其後は金龜山北野守  
安富セラタラ彦根山の粗者と白河院即年改之  
ト事元亨初書年下もあら今金龜山井伊氏の傳  
タラ小野主トカム銀章と稱天瑞天神の社一所小  
玉守主トカム金龜山北野主トカム彦根三の郡  
ナラ小野主トカム事と稱遠く長倉守の事と  
可矣ス而生長命仁祖の裔人ノリトを不當かハ沒ケリ  
トアヌ湯井、名次少からまく事の虚テ金龜  
少佐ヤ、圓了信長の玄人あらきアヌアヌアヌアヌア  
被楊柳ゆく親音と伴の事体あらきアヌ名譽犯セラ  
画アヌ御行物記ナヌ事と石見歌謡の流音経記の  
流音アヌアヌ御行物記ナヌ事と石見歌謡の流音経記の  
長命守モニ高主アヌ御行物記ナヌ事と國語アヌ  
御行物、長命守本主のアヌアヌ事と草創の時一寸八  
分至根音の序歌以ゆく始モアヌ

六所横瀬石 あまのよみに僧を守り更にか定  
崎やるひ石を高めしも

天智天皇御湯 あまの西の方ある天皇陛下の御  
御遊ゆきノ如き

礼拜石 山を下る町計山の觀音室坐といふ事  
坐らすたまうまくは全あままく參詣の者いわゆ  
稽首礼拜をばは謂也

松ヶ崎

長官守山の西の麓山

波多の海の所なり其の内はあ代を立つなりゆく  
水のあすねを海めにせりひよの處と謂ふらん

と傳ふれあくと長令すの後記ゆくと佛土三千風、  
日中紅御文集小達圓の細は水茎の島入産蓮は波の  
薄の庵本の葉の沖のうちくね、崎の本影ともぞを登  
蓬は柳十分桜の薄の事は長明寺名が麗妙、経無事等  
ゆあくちきくふきとのぶするる年はいふてく風ひ  
ア事ともぞくと聞ていくと身すまほんとおも  
まほひの事ゆくとあくさくアノ聲を以て比ね、海の邊の村老  
ゆあまくび身と大不も聲くせ事と記す

韓財天主

松崎の松薩焉

三ノ石

松陰の源(みね)長命寺の總記曰考  
石の間(ま)一ツの梵鐘(ぼんのう)を、鐘懸(きくわん)を差(さ)す。人

も接(せつ)ふものと、鶴(つる)の音(おと)を聽(き)く者(もの)多(多く)いふ。  
を集(あつ)めんとするふか。不動(ふどう)尊(そん)のまきを以(ひ)て甚(ごん)  
く圓(えん)く名(な)く今(いま)から石(いし)おはに意(い)地(じ)をかくよ。云  
く流(りゆう)き。長(なが)石(いし)手(て)山东(とうとう)の本(ほん)巖(いわら)山(さん)に瀕(びん)する。人(ひと)  
の聖(せい)觀(くわん)音(おと)が現(あらわ)れ、流(りゆう)き。是(これ)は聖(せい)觀(くわん)  
音(おと)をもとて、是(これ)は聖(せい)觀(くわん)音(おと)也(や)。不動(ふどう)尊(そん)を起(おこ)  
て、不動(ふどう)尊(そん)は流(りゆう)き。古(い)く傳(つた)へ。信(しん)ふ不動(ふどう)尊(そん)を起(おこ)  
て、不動(ふどう)明(めい)王(おう)を起(おこ)て。

盧室(ろしつ)禪堂(ぜんどう)

山(さん)の麓(ろく)の傍(そば)を墨(くろ)荷(け)ふと相(あわ)せ傳(つた)  
尊(そん)海(かい)は、下(しも)月(つき)無(む)小(ちい)世(せ)出(で)修(しゆ)み事(こと)。三年(さんねん)後(ご)

金(きん)室(しつ)の席(せき)ある。通(とお)じて、是(これ)終(しゆ)不(ふ)少(すこ)

天狗(てんぐ)

也(や)山(さん)は、多(多く)長(なが)石(いし)手(て)の緑(りょく)記(き)曰(い)  
天(あま)狗(ご)。正(ただ)法(ぽう)傳(つた)の事(こと)。其(その)事(こと)を尋(たず)ね、後(ご)高(たか)院

門(もん)主(ぬし)の比(ひ)高(たか)寺(てら)少(すこ)小(ちい)門(もん)坊(ぼう)と、其(その)事(こと)を尋(たず)ね。院  
主(ぬし)一(いっ)心(こころ)三(さん)觀(くわん)の秘(ひ)旨(し)を以(ひ)て、也(や)山(さん)は、事(こと)を曉(さ)

く。東(ひが)しや冥(めい)土(ど)の事(こと)入(い)、肩(かた)の西(にし)は、痛(いた)

諸天神を御ト佛は毎晩伽藍持燈のみよん天狗も  
ひしきを小因く相と連々奉事坊持燈と仰て奉る。其  
身は掲焉云日母也山海津曰陰山有獸甚狀如狸  
名曰天狗釋文曰天狗形如太安有色無毛體長の名  
記曰也名道山有天公在乃所謂天公者何物乎蓋自  
古見名鮮郭石傳謝勝珠文序會漢矣大山名林僻  
迫於海曠无人所處蒸暉沛易陰从其山海陰虛  
多有石之精靈深融結化而為獮魅魍魎非人非鬼  
非幽非明亦一物也日本天狗殆庶氣于是古中華書く  
本多山怪似而非色深山窮石性又有甚狀不可見家

浪友水脚長人如僧子鼻勾丸修復小々羽化雲霞若  
變化易歎懼人法家曰天狗蓋象惡星也多紀似天公  
明月記似天狗大脉綱天狗狀如狼而威法其軀人多獸  
首也鼻長耳長牙長鬚也左右石道素則大怒諸書  
云肉氣如火也佛は形を守護玉を為すは人佛  
波の中又も天狗の佛はの權護も多事ありて人  
勤もすむ日佛も寺尼と云ひては天狗の事ト人  
不ふも漫山の左仰坊比良嶺の次第坊の額タガ坊の  
傍浦の色十八町きこうへ事は争ひアシカ人村の常安

其の後帝國少國や云國村九郎相於國原又立郡年甚  
色高きとぞくひくと云はる。天祐也。大基  
た。日ソアノノ所ノ事は天祐也。大基  
寄。事。曾く貴重。事。天祐也。何と。建て記述  
信長殺生場。上の平地三十間ある十間。縁。田年記  
曰天正六年。三月六日。大臣。信長。御。鷹山將。ト  
奥の鷹。御。參。ト。今。船長。金子。若。船。御。泊。二。の  
間。御。參。跡。物。數。有。同。八。日。剣。安。云。御。佛。微。又。曰。天正八  
年。夏。夜。三。月。十。日。大。臣。家。齋。與。鷹。山。御。參。蟲。ト。虫。  
了。御。船。カ。タ。今。船。寺。嘉。林。場。小。至。御。被。移。小。音。

まく。而。監。白。生。の。御。鷹。羽。振。徳。と。希。ア。の。御。叢。及  
方。シ。シ。御。鷹。跡。見。物。群。衆。を。先。取。シ。テ。御。鷹。走。赤。逸  
徳。徳。も。シ。羽。走。シ。物。數。往。復。因。十九。日。蟲。云。ア。シ。  
而。飯。御。畢。ち。云。徳。ふ。ち。闇。秀。者。の。ゆ。を。場。ト。

阿。麻。陀。守。跡。長。命。守。の。続。ア。シ。伊。阿。耶。山。阿。除  
陀。年。ア。シ。ア。南。都。元。無。守。の。僧。賢。和。國。基。ア。相。傳  
左。昌。無。昌。ア。小。使。の。年。ア。守。破。滅。ヘ。ニ。代。宣。流。曰。貞  
親。七。年。四。月。二。日。生。元。無。守。の。僧。傳。隆。大。は。師。住。賢。和  
奏。言。久。住。近。に。國。野。附。郡。與。治。御。後。主。金。云。云。是。ア。也。

今本紀ニ源生郡を有し何の日野洲郡を割て源生郡  
が附屬となりて不動寺山頂上天王岩と名づけられ石碑上  
に記す

近江輿地志畧卷之五十七

丹山 長寧寺下十八町に雜居。牧村の名  
ある。尙時牧村の東邊。高石山主あり。峰高と水  
深く岩石夾み。湖中の大鏡絶景あり。松老れ。波音  
渢蕪。云鬱々。而往。あり。又。今。小屋の落敷の跡。古  
より。松先か。之を以。櫻も。小徳目。紀齋。初曰。其  
先朝太政大臣。慈忍輕厚。雖唯功高於天下。尤復皇朝。  
外戚也。是以先於贈正一位。太政大臣。斯良俗。我今已極。居  
位而准國礼。猶有不足。竊思。事後蓋於宇宙。終竟未

允人望宣依大公故事、追以幽に十二郡封た。漫海を云  
云かはるもども不比等の處に、小樓止の事はとあつて  
も漫海らふ對をまつて死後の事也。世人漫海らふ對を  
色して、多を恐く此院を附會せり。又、秋の跡と等  
る。此は漫海のみくへゆく、遼後の足利義満の跡と等  
く。樓止セキキテ、死る。回記、永正八年八月十四日、公方義光  
云函於兩岳山、年三十三歳云々。樓止も、ゆく。瀬波  
兩公樓止の跡ゆゆく。と、ちりて、古物ふ御ちられ  
の水茎の事も、水茎の事も。ひし事は巨勢金出  
は也。あはれの景色を、見る。欲きれり。絶景筆力の及

れふ。雖は、無と勘はぬ。水茎の事も、年々、水茎者  
無の事も、ある。今、竹塔、小砲測量、修かゝる事も  
御らき。皆、放さう。臣相、うふ。人廢を愁ふ。

かうかの、よしくある。水茎の事も、萬葉、色づく。  
と、後り。今、唐は、傳統名武の、やく。天平元年三月  
十八日、石賀國小草原。全島は、多天皇の、やく。其を  
ぞく。水茎の事の、全島、お始き。明ノ一方、多葉曰

れ風を日美吹者。水茎終焉。本葉色付。尔、富良  
天霧相日方吹屋之由。茎之墨。由門尔。般主者多葉  
仙きわみ。は、極末の事からままで、實す。由門尔。般主者多葉

の事と云ふ況也と稱號があつて

新吉と云ふ

顯昭

水茎の苗の葛莖と色付くけれども木の水莖

新吉と続ま

水莖の墨の阿波ちゃんまくへんと謂の水莖

新吉と續ま

水莖の墨の阿波ちゃんまくへんと謂の水莖

新吉と續ま

水莖の墨の阿波ちゃんまくへんと謂の水莖

新吉と

維縁

お主の恩典をもててやうて尾の鹿山にてある様人

夫あま

高門院

お主の事の村蘇打なひき庶のまじめに松風さく  
顛狂名所集

馬高

お主の馬鹿達の波うるを筆のあらふ名ふはましと

筆海

碑園 事はあふらう

蛙岩 其形仰ぐる故ふくらつゝ

八畳岩 其大きさをたゞく無事と古今見る  
小三十疊塗ふをもつて猿の石あ

八艘隱 たゞくはあ八艘舟も隠仄き経のち家か  
アモトカハシアリテヨロ津ふ圓ふらう

古跡址

筋石船と多し足利義満棲止と云ふ所也

其後際ノハ所謂墨山の島もア今ふ石垣等すまう 謎殊

底もア

相模お詫年中たゞ利根川と麻生川に住む

云利根川住

ムアヒタリ村山彦次と名ひ

信長の

アヒテの秋徂火のあす大千回も是のちに在り亡魂  
也よしき臣櫻子木室事徳田軍記伍之本日死矣

也

也よしき臣櫻子木室事徳田軍記伍之本日死矣

小所見か。或は功力を窮る也。共に無事の御起ゆ  
是の御主乾甲殿守といたせし處もあらず。とあまか  
里の後方へ詣ひたまつて馬を十三町ほど走らし八  
幅の後の後方より御く三日間待たれり。御起ゆ  
の御法。因も因ゆれば、御起ゆの御起ゆの御起ゆ

地老像。因ゆれば、石佛より御は御の化身と  
云ぬに接觸よき書ふゆ終もて、廬女と細きる伴卿を  
傳す事多く。又ふ別説の紹と御やア事と御う。臣根  
事多ふ御免跡也。大細きる伴卿。紹小。名すどうのき

びぬ少翁と云ふてやがつゝぬ少翁とも云ひんも万ま  
集。又と云ふて伴卿向京上道此日馬駐水茎水城一觀望有  
家。于時送歸府吏之中有遊行女婦其名曰兒鴻也。於  
此子傷此易別嘆被推會試涼自守接神功也甚歎  
曰。乞まともにやめられたれどれ凡松根神をあくわいと  
ふかと云ふもを以て初ア。由茎水門へとて事六  
時及渡後四の事とたまく名の同書きをねく。事の  
事とせりあらず。お伊佐士の風。日中御立候。其の事の沖  
のうちとねケ傷れ本陰と云ひ茎連と薄。蓋其所在不

ああのものかはあの後の事である

奥の宿 畏みの正北ふゆ 湖中の島をあら三町  
余南北十四町有渡人多く此ふ住む其のの名をあて此  
を名る己と云ふ人有也と謂ひて左次ノ所謂奥津  
竹山也住すはれどもおれしもとて延長ニ當  
生氣無原修祐祐と號くと古方には奥の宿、歸洲聚  
属はと云ふ三代実通曰自熙七年一月二日す元  
守源傳經は仰住院和菴吉久住近に國歸洲弘奥  
鷦鷯海音會修祐非夢中翁曰墮云消矣未免蓋復此  
以佛力將鷦鷯勢權復國の要な綿邑室清乃御官  
寺叶井明教詔序も云々も身も終基江原の傳勢大師  
の妻也と云ひと顎ありて蓋心の物うほは思ひ  
かも早うかと傳承と云ふ傳息せんが平生の根拠  
を察らるゝ妻はくじと佐ノ木もあまもを覺  
しも御天皇の頃ハ忍鳥と傳ひ殿の主ふの傳院と  
傳う少額は正義とく彼如きふへ非ひ爰の湯保連大  
記小栗山原久確湯乃

の私書

風流さびの湖をもれく月夜きよりやまうらゆ

新拾遺集

知る

降り雪はそれもそつとほんのりとてとくに済まし  
八尾大明神社 奥津嶋山のうち佐久島の御法事  
もうすく三洋さん

白髭社 四川小乃

西小井村 村井村の正北山に佐久木豊浦翁著  
冥息源小井源節實元祖より家貢清灰清房主房  
仰て在住後源氏石野高木源代は清灰清房也智圓  
次序有りあむ冥息源源景准也と立脚一而秋の山礎  
ひ士祖翁の因より仰て勳功を致候承るるもさきあき  
根名は彦原秀郷公の清灰源國政翁の源也と云ふ

香店村 流小井村の東山に香店佐渡守相浦同  
源喜田里浦代とあがる在住者故物故のあり先佐渡  
守相浦ハ政朝公威徳院々く自害の時打死近侍の佐  
渡守賀輔入道一里浦父家共小寅小源也と申  
を立てる

西多村

喬多村のあき

佐木本莊 既に佐木本郷と云ふ者専ら姓事と云  
佐木本庄と云ふ。事は佐木本の法事を称すと云ふ源  
氏の佐木本を称すとする所も佐木本の先祖歴代と云  
ういふ事有りてあるにあらずに相続ア林し事す

佐々木莊名左衛門一筋三本莊延慶寺山裏附の事一筆  
表記小アマヘテノ者樂守村小中村昌國守村守昌村は四村  
を主無事大今云係得くは西村は主を佐々木莊の三姓とも

立憲寺村　雲谷村の東端に立憲寺村と云ふ事は  
舊領守有を以て云ふ立憲寺は今の渋谷院を以て  
島云津森院　立憲寺村より渋谷ふ島云立憲  
寺渋谷院と云ふ雲村には島云山下ふいよ。中村  
了徳田信長云ふ伊豆を築く天下の清手を松原す  
るの日は凶厄多き事もとほつて西川渋波瀬野瀬日

皆と旧名小湯人惟、南寺のものとの清教院と号し、  
南寺は古寺蓋曾守風法院ともよぶるの創建す。  
かくしてある教巡像は思翁渴摩の作也。長之財  
第清教院本同也中古文和年中六角利高  
氏頼宗が破除して作ら本家代の書也竹とひ無  
後御室のあつてかうて天正の跡から修不換。□裏  
をなすれど海教院院は不改風法院金勝山海  
教院ともいへて隆光院下へあ天正の僧也。南國霊  
郡金勝山の幽谷小盤石へ不動念佛と仰へ。家法元  
年三月廿日示寂。身八十歳中八世無量圓融よ人の

時より織田信長軍旗の布衆を金勝山下野<sup>ミササギ</sup>、明  
惠山福<sup>ミツル</sup>と武門坐敷の号<sup>シテ</sup>を冠す。然るに佛教區ゆく  
多其者<sup>シテ</sup>は武門の施氣物<sup>シキモノ</sup>を外す。時は萬命日暮小  
迫く<sup>シテ</sup>諸余の行難恐らば成松<sup>シラタケ</sup>を種<sup>シテ</sup>、御<sup>ミ</sup>お叔祖<sup>シロ</sup>  
源空<sup>ソク</sup>法事<sup>ハシマ</sup>住持偶武門の化事<sup>シテ</sup>示<sup>シテ</sup>同<sup>シ</sup>候。惟<sup>シテ</sup>口称三  
昧<sup>ミハシマ</sup>不<sup>シテ</sup>無<sup>シ</sup>教<sup>シテ</sup>也。然則公も復其<sup>シテ</sup>真焉<sup>シテ</sup>信長<sup>シテ</sup>  
示<sup>シテ</sup>疏<sup>シテ</sup>聞<sup>シテ</sup>大<sup>シ</sup>佛<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>慕<sup>シテ</sup>小<sup>シ</sup>謂<sup>シテ</sup>自<sup>シテ</sup>不<sup>シテ</sup>運<sup>シテ</sup>天下<sup>シテ</sup>小  
國<sup>シテ</sup>に<sup>シテ</sup>威<sup>シテ</sup>を振<sup>シテ</sup>導<sup>シテ</sup>而<sup>シテ</sup>アリ。天正年中信長天下を<sup>シテ</sup>  
ひ及<sup>シテ</sup>同盟<sup>シテ</sup>不失<sup>シテ</sup>參<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>あらの陽<sup>シテ</sup>下<sup>シテ</sup>小<sup>シ</sup>極<sup>シテ</sup>意<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>所  
う<sup>シテ</sup>先<sup>シテ</sup>感<sup>シテ</sup>法院<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>名<sup>シテ</sup>を改<sup>シテ</sup>津<sup>シテ</sup>巣<sup>シテ</sup>院<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>名<sup>シテ</sup>。元祖

隆<sup>シテ</sup>堯<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>下<sup>シテ</sup>津<sup>シテ</sup>巣<sup>シテ</sup>坊<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>是<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>破<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>山<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>金勝<sup>シテ</sup>山<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>  
是<sup>シテ</sup>又<sup>シテ</sup>隆<sup>シテ</sup>堯<sup>シテ</sup>下<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>山<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>金勝<sup>シテ</sup>山<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>新<sup>シテ</sup>小<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>畫<sup>シテ</sup>ま<sup>シテ</sup>參<sup>シテ</sup>修<sup>シテ</sup>  
飾<sup>シテ</sup>也。小<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>多<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>村<sup>シテ</sup>鳥<sup>シテ</sup>流<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>法<sup>シテ</sup>勒<sup>シテ</sup>書<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>引<sup>シテ</sup>稱<sup>シテ</sup>。刻<sup>シテ</sup>  
金<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>圓<sup>シテ</sup>中<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>一<sup>シテ</sup>流<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>統<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>多<sup>シテ</sup>あ<sup>シテ</sup>す<sup>シテ</sup>し<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>寺<sup>シテ</sup>  
總<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>小<sup>シテ</sup>金<sup>シテ</sup>守<sup>シテ</sup>也。天正年中<sup>シテ</sup>西<sup>シテ</sup>ム<sup>シテ</sup>滿<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>守<sup>シテ</sup>が<sup>シテ</sup>信<sup>シテ</sup>  
長<sup>シテ</sup>連<sup>シテ</sup>に<sup>シテ</sup>明智<sup>シテ</sup>、ろ<sup>シテ</sup>小<sup>シテ</sup>弾<sup>シテ</sup>ら<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>敵<sup>シテ</sup>。守<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>ま<sup>シテ</sup>く<sup>シテ</sup>よ<sup>シテ</sup>そ<sup>シテ</sup>  
今<sup>シテ</sup>存<sup>シテ</sup>る<sup>シテ</sup>有<sup>シテ</sup>小<sup>シテ</sup>金<sup>シテ</sup>守<sup>シテ</sup>あ<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>移<sup>シテ</sup>。今<sup>シテ</sup>法<sup>シテ</sup>東<sup>シテ</sup>智<sup>シテ</sup>恩<sup>シテ</sup>院<sup>シテ</sup>  
少<sup>シテ</sup>通<sup>シテ</sup>い<sup>シテ</sup>教<sup>シテ</sup>迦<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>像<sup>シテ</sup>一<sup>シテ</sup>龜<sup>シテ</sup>全<sup>シテ</sup>金<sup>シテ</sup>佛<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>阿<sup>シテ</sup>訥<sup>シテ</sup>院<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>三<sup>シテ</sup>尊<sup>シテ</sup>各<sup>シテ</sup>  
晉<sup>シテ</sup>會<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>二<sup>シテ</sup>色<sup>シテ</sup>は<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>帝<sup>シテ</sup>門<sup>シテ</sup>陽<sup>シテ</sup>拜<sup>シテ</sup>。教<sup>シテ</sup>達<sup>シテ</sup>元<sup>シテ</sup>王<sup>シテ</sup>。

勅部より詔を生奉る日も府縫の物と云ひて陽  
陽は堆朱と稱し修業せりも油池二尊の画像とは  
相傳臨薨江下而日伊勢内多小篋シ小九十九枚の曉片  
の画像を賜りてそく更見之像乎以画像に參毫セ  
御衣と重き紙と御行徳と其時ふ徳と御舞のヲ  
を身著し而腰を今石重を支えし今ふ相院ノ御  
靈院一流の御附タタケは故と從ふ余御前小五郎事焉  
るうるとも云候即承應衆の信長の像信長在世小細品  
ありまほ佐木本多種因爲蓋織田信長の状後記に  
御院

今不平通條即爲家臣シテ山高行あらと  
の家臣達絶意役者シテあらかじめ無と後  
無難事多細也間囁耳シテ射ア入  
名脇道

八月二日

ち穂判

海叢坊大

四七

能ち強以復信多謝至足

被居候私多々お抱強セ

手書ノ御禮

四月五日

立憲制

津農場上人

即同前序

えんせん坊主ち領り事  
時々中下國と相済く  
自食其力もめ方、

跡してまを立ちて坐ての

欠不の事無てやうす

ちつて之

十月十日 住長

西行川竹より  
神木村三子との  
成通ふり

三ツ協

津農院思内に了氏相三色佐木謹運  
其二子持徳時徳ノ陽子家譜曰徳徳四名徳徳任大膳  
左史前髪名吉岱文安三年正月乃三日有故自殺近江  
國佐院号竟死于家考矣又傳於徳徳及其子持徳時  
徳時時自殺書焉乞給下明智軍元小丹波の國志  
多伊守常山田次兵衛同門源實高氏河村助馬の墓

辛巳ノ切腹の事と前後ノ臣才を問ふ院主を以て考  
るふ過去帳小名もあくお恩内や場しかよき。山の國  
山忌毎年六月六日より三百三十日金佛三昧のけ事  
ゆ。國の三日と金佛元年二月十六日も十二月八日寧寧  
ト御太泉の本尊を歎ひ遺言も九月あり。三日  
まことに修院毛とらんせん月念佛とある。湯の  
事は天正七年己卯五月月中旬の以て。淳ひふ是年  
云傳國東より奉了。其の町より湯はり時ふは年  
日蓮宗達教紹智大師脇侍内信長記より  
侍内也。而人湯はのをく  
あく不無強を強くして湯ふ及ひ。是頃のみの日元を充  
て正因若か經利裡傳書云。國主侍内軍主を兼ね  
て正因若か經利裡傳書云。國主侍内軍主を兼ね

院力意院妙弘年既大師坊埋没を先坊主源空源清  
の不徳あるとして其を出立しまつて高名丸を爲る  
安七助久左衛門吉川行徳と称わづ。共に吉川菊  
禪寺秀長を公家と有する有勢の僧。因黒政士右衛門安  
兵衛を立候。因吉川も吉川源清院のちまわらく。ま  
湯を自らも湯小拂て湯を一同もあて駕ぬまと利ふ。  
お湯のア洋小四度とお湯に被れ。正化禁日蓮義  
正因若か經利裡傳書云。國主侍内軍主を兼ね

相好今般急近に國誌編輯より御教院生ち事力  
をもとめ、萬全致の事と助く者有可謂也

中平村 美恩寺村也あら

小中村 中村のやあら

常樂寺村 小中村のやあら)常樂寺は古寺も本  
院の跡あるるの(一)山陽道通に相続の(一)松子寺を名す  
官本村(一)山陽道通に相続の(一)松子寺を名す  
寺(一)山陽道通に相続の(一)松子寺を名す  
兵部省の碑記をかく無仁免甲を障まく祀ふ出下山邊  
の御代伊庭佐勝等を相隨在里を守つ對す確據有能勤

の時小内里(一)山陽道通に布村回廊の跡常樂寺の  
西面也

神主本神社

常樂寺わあら)神主本神社の

京風瓦瓦余小あくまで其異曰正一位位從之本四所左神  
右少一少彦名命(一)仁德天皇中三(一)天皇中四新實  
親王御社四つ自給(一)終焉祐祐(一)也委御石丸と  
左殿(一)同少三間拜殿四間里方移門を左額は乞達  
理屋多(一)御室也左元每年四月上の年日其有る日晉  
之御事三年少一(一)馬脚の豆(一)御事御事御事有

ち神集相立日流瀬馬の被式有と宇多天皇内七世孫、  
本名銀瀬經方の二男と立原經定始而浦ち神主自色代  
を廻游する所也後也御古事記は數多所謂經事と云  
御天王寺也臣殿十吉名を御納庫文書今後事記ニ松居  
シムノ偶た天主也至あ松之間も居也今松化の里因  
菊北二町余東西一町多々性古社八百石以下五年半  
中松木本氏祖者松と没後トハ御供奉年奉ん然  
元長五年六月 本殿主乃様ト松景徳と奥小助く  
瑞君又菊北松江事御石碑三處歟既往也  
御君付く閑居の捷行つて傷東山かく伊庭の近來

高ゆく盧鍊江太神主源安重と被式ガ松倉伊豆守と  
乃く一面石の被式を穿附り又松のあれ沙羅子毫王  
の御面二つ毫の丸柳みのひあはの伝記も本自家の額  
定保、隆佐木本十二世定保文治二年源松御師自家の額  
高木定保 桃春御筆記一毫行内侍主良高御王西年  
の御記ても仍く本氏輪跡ある瀬一毫多行御前解只、  
慶長九年 本殿御君の御家をうへ天下大將軍と云  
御寄と御刻さう

御筆文集佐木本祐元曰近に西蒲生郡佐木本明治者  
近見式所載物を貢給仕先也行詔御松記が表名奉

宗仁德天皇今有濟其易亦起則東洋其國未然也夏名  
余降自天以白鷦皮乃取鷦鷯羽衣而廟御也亦國  
仁德所奉奉大鷦鷯天皇鷦鷯以云裳之收乃是与  
而貴通用与何之本因訓也以一帝一帝之無迹於茲而  
有授累傳於世則所傳稱有之跡也宇多天皇五代承  
継多佐乃西陵源成物物生其傳也宇多天皇五代承  
其孫源次方支源乃物生其傳也宇多天皇五代承  
武土源其系業源乃物生其傳也宇多天皇五代承  
松葉源貢之於九州而延及於他邦者不守榜討也蓋其皆  
可為苟私之即為欲遠隱龜右吉將領國而傳之本兄弟

有武功其即族世乃江州守邊甚後足利高氏乃高氏  
時佐、布氏族有曰惠連良領江州牧也、皆累以法也  
赤福天正乃承仍之本石越后江州牧也、赤福源矣方  
今所役者之言曰本社之部有曰天香院祐興之部也  
固其情事固有好事矣天皇之文使之白壁高天  
祐大黒天八幡主萬福寺之主也、天皇之文使之白壁高天  
八王子山南院院主也、天皇之文使之白壁高天  
寺而已又曰祐内善治祐是也、天皇之文使之白壁高天  
祐然每出之必有死綠像氏皆農之締是焉故深秘淡

多文自和五年六月十九日佐元曰勅令奉接正佐湯之

貴大神其經祀令有三日者有神領八百石蓋又依  
傳本也。所為闇歎歎而減供及。東照大神君之活世  
偶今所寫經坐地望祭之萬福時暫憩於後邊旅宿聞  
其所由而野賜封土一百石。左法院殿右獻院後隨其  
間或脣齶有余色以修理其破壞。時勒泥事。御靈四  
月上旬日丙子五月丙午西例多祀令程不解想更少矣  
名氣有矣。我國榮味。物有聲焉。力且定廢帝。方無  
麻。是以利而陞則其功石少矣。仁德天皇者布於英  
主也。四海左平三韓未款其政績昭々。經圖々以其共有  
鷦鷯之稱。奉祀於此者良有以也。中棄以末忘。源  
流

固不以以世辟國。沐私或為私氏。被混或為濫祠。被掠  
而皆失其本也。甚從假者。盲聾。無以知。豈不悲痛乎  
聞以私祀。每有四射。子名安邦。像号四射。明神。傳種。其本  
地有裡音。某附思沙門也。然則先是。除屠。既有觀觀之志。  
無於僅存其本緣名。又乞耶。考也。遂因其情況。其所  
詒考其所傳。以祀之。以易之。年卯孟冬之云。

腰紙 佐木本祐の東山からう。要害の跡あり。信長  
ら安芸守安彦は。は津倉の腰紙を准て。席坐所の由う。

直に夷地志略卷之四十八

本末 蒲生郡弟五

豊浦莊

先乃小本名の北也、ちあ村、差浦、須田村

毎ら村、石寺村、多々村

ちあ村

豆良字、多村の清もと相傳、古刀工、角三郎

は、而小住、と刀刃を製へ、もと高木貞介と云、後、相模みゆう

其の孫、連続、と刀工を業へん、至正天文の年、すなはち承元

漁院門、本山鍛冶と云ふ。勝浦院、漁寮院の事也、長崎派

治、湯を考へ、小高木貞介と相模の國へ行ひ、あるて、又よみ  
て、此にゆく御製、落葉者と、暮金無からず)

10

卷之三

高木村の北山は豊浦氏ハ七代の名族也

公四男行實、伊勢井上守中井謙國種村は後流也。十代の至  
秋信緑ヶへ北條義時公ノシ、菊園一秀領羽の吉春吉野の  
少墨浦の名は先祖も、栗崎の領のト、許あふ候く  
馬浪長昌の名と舊地不賜、空東監ある。  
明智日向守正浦跡、豊浦村少弓、此外貞安上人  
爲妻跡あり。

三葉堂詩 墓浦村中行渭系年の葉仰毛也今考  
テ小後記ニ書け其元は青蓮院と遺傳院の筆上毛氏  
端一派云西毫のみ豈ハ裏葉西毫の間小画圓行也

刑部書院左衛門画也 西卷の題書 丙寅文元年八月十七日  
ちりく足利將軍義植、利政、西卷瑞少将、河内源氏  
其要との、其畧曰に勅帝宸廟は日本國の最勝地  
所の造福也 天地よりふるをもて造福する海上に一株え  
素の木生むる、日本三宝草ともす。一、金鳥と書ひて本  
傳と云。二、玉兔と化して枝のあらずや處へ生えりとす  
そ曰え月元のきぬう。一花ふとちくゆくあり。今の大良  
山也。其根八丈かく。其色白紫をまへたり天蓋の也。  
故ふ徹山と云。原清極さきよしが小僧於石村のあらわしと號す。又と徹山と上良左  
右衛門の名をもつて同名もす。

上ふ事年より即精食と建て相も正年よりへ三十三所  
巡礼の越也 俗清淨すふり事は相も寺の事相あ山東  
宮主は高即清國の事而石毛石毛北の仙窟うする  
葉岬如高は天智天皇の御宇栗原の故ふえ高をもく  
高麻山あづむ子時や四の假多門因皇安高すかされ度ミ  
らくゆくの瀬もる上ふゆき觀世音梵音海潮も候也  
聞音毛及須本念と云波れ毛り松木波のとくやる心を  
そんもひまやまくふ末湯湯の先七方山もとくもく  
さきくさく天皇寄まの恩のをあ一御持僧空喜和尚  
をうそく聲もふ和尚云苦役行者室主絶頂ふよろく

公方をうそくふ西方すばくもく海潮の程也ゆ半月の面  
西ふわつ傷小障の天蓋ゆ日よかまうあふ天女在縫  
竹のちをうそくふそれとひくそく小障也とえくぬの湖  
天蓋とくくくは今のが山也天人樂を奏くと座せら石  
をは天栗石と名く多天ハ即ハ太老王の意化物ゆのては  
老王あ渾序悟忽小羊ノ念りく瑞夢也天皇即候先のを  
アムと墨トく七光主と達三一走車和尚小沼く湖上ふ  
向く能時の能房を作せる意人脚丸高門栗原の石を

是則祇園精舍のあさる医王菩薩よりは、總出應  
しもふれと善逝、濟しよ、原清云所含の徑より勝竹傍正  
相國寺より御佛也。御佛也。世を離す事無く善世ふれ。是意  
みうく善逝、佛と云はる事也。

のまづらじん民の病苦を除へ太白牛湖中より浮き出で  
せ本を以て奉る由の故かくもつけて解ひぬは牛  
す。鼻と云ふ梵天王もありて、無病化してゆゑと  
いふと稱は善逝ゆあめ現りてゆふむくと云ふ被  
馬陽石の面小岩頭の蹄の跡今も有り。原清極山も皆自然  
に生けたる馬蹄の跡もふねど、肥後國阿蘇の石洞ふ石地もいは  
がめきの石二つは、揚浦國林寺村ふ桂なほ、阿波國賀傳寺や馬石も  
アサ壁も傍か金石なり。あちか墨石、鹿石、鳴石、第名立石、石葉石地  
石臭石なり。ちるべちるべちるべ、ちるべ、緑目島、陽風云先菊海古碑紀吳郡諸山湯

金華源流杜陽雜篇祐水浦高中勝記物是考金臺紀圓三寺國  
金海源流桂海處衡あ等かまく義う。御もくらむ奇石もくらむ  
石圓ふ馬の足のゆくものゆくもの自らとひよるんぐの金玉の  
足のゆくからん處も馬と化せば尚ぬ馬蹄もか。  
金玉の  
務食を產す。自國六年十月八日定事を奉りて、  
佛を尊奉す。其後崇國國源天皇遙乎射山より幸ひて  
陽陽石上の足の跡を拜て奉るをありて、三千石をニ代  
々もあつて。其の食めり。跡もくらむと御歎をもくらむ  
竹君え明天皇より御法也ハク年御靈輦御走王の女のが家  
童女の後身五位八年ハ法華の後悔を表す丁の家  
臣也す。又以後紀如ひある。今作也や虚偽の事の多き  
一佛氏修造の湯もあつて。人曰く天智天皇靈蹟也

う事も書つてゐる所の都トニ事まく人天智天王  
あ實の所隣み鄰トニ事まく栗原が今の膳所城下の町のき  
るノ事定惠を召して其を同じて定惠等云ち役  
行者多半山の下とてうむを基めて經行者、全  
四一代文武天王の人也事跡はゆき元亨抄書小  
さくう多とは則天智天王より曰後代の有り天智  
天王人王三子九代の帝るゝ事と以其相應を主す  
況やちくら者少かひとくへ腹を翻ノ第ニ白鳳  
古年十一月八日定惠を奉仰して帝良御と達三す。  
事偽ありテ元亨抄書定惠が傳と極する白鷦

六年余入京一努其の後三十歳余れ國秀元年而歿  
其傳小伴少くわす白鳳七年六月也。いは無劔白鳳六  
年余在院つゝじき様が。亦光明天皇嘉賞す。行幸  
の事絶ひかず。又ハ元亨抄書五年余其事かつ  
ス。又ハ行幸事。而傳は居民の事か。かく。一事  
をかく。行幸事。然ふ。行幸事。傳。かく。一事  
其上御製參詮俚の事。無能あ。一後世八年。行幸  
事時を示す。ハ。行幸事。明天皇の御後世八年。行幸  
事。傳。かく。行幸事。又かく。行幸事。傳。を表す。

聖朝天皇御編旨葉仰手消五佰匹錦一佰長布一疋寫  
多方行廿田一佰丁四至近戸國蒲生郡東限波津二所生雲  
島山、貴山、曾津、勿浪鳥坂長海西限五條畔北限大隅  
縣而檜上併以物貢教經為由一切大主中宗經禮滿物疏  
詔守於鶴後廿同況今櫛磯之限日月未未除教網  
彼寺中多有代發給大上天皇於傳教有弗擅侵法禁  
惠賀万病消除壽命延長一切所欲皆多波多令法久住  
移陽群生天下太平以民快乐法界有性人必後破辱十  
方三世佛菩薩一切至靈終萬善地波多之教劫中永  
无出焉一切佛人名次大慈金剛多羅讚法優曇大喜

御王及普天率云有大威德天宋地祖七寶等莫能攀  
立功右臣將軍三皇子兵起天洞也滅孫乃石紀福教  
勸引者世々累祀陽芸草卑卑參拜無年天平慶元年  
國五月有日勅御朱策奉勅正一位左府左軍帥橘縣  
通名左大臣從二位嘉原教院

須田村

島町村 八幡町之一里北也西云山の麓也中古濱田信義  
を山小所傳承す時反ち至無常トトトナリ社をあらわ  
は室二三里、岡の御本をあらわす今志く四名山蕨川  
ア其時の町口ハ備つ日後セリ事口備修不<sub>カニ</sub>

安古跡址 則安古山山下二町许廻一里

半室廻上小天井門全其頭石面の砾引石もれ  
二の丸より北東に北ノ間敷を左其頭石面の砾引石もれ  
相模秀吉或島助有者本加々在す條將監武井肥  
浅瀬田信忠長行鐵田を浦吉蘭丸福留手取  
市橋力原を立石山角之郷又稱年有號也安  
ち山の内小寺山山角之尾源安の異地と號之貴  
尾也寺山角之尾源安の異地と號之貴  
ちより推定為是の事より是秀季に鐵田主犯曰大師  
天守の脇方立石山のうち十二間余掛よふ七重の天守

を起す。萬葉代木の御三毛先下、重尺石築の  
上と山木用。二重は御家屋等は萬字間を西十七間  
ちサ十六間半有、柱敷三百四本三引、柱長アハ間半  
一尺九寸六分、高は一尺五寸四方の木造、脚柱の内材  
あても空き添也。此度の御家西十二間余は張替  
後の御元狩御、御外之御外画と同様、内御書院有  
とをすはを守の御座の景画と其前壁、金山の石を石  
の画々と傳てを繪の間と云す。其次、半室奥の  
多納のあと、半室奥を繕てある三重あひ間後廻の傍室を

馬人其次八年來居より十二年後二年春其源小半也  
即勝と仕立る也以ふ亦八年來たりあるより五年後即勝  
あち年來以ひ候候也即織室也北方面に在り其地也  
名是ニテ云々即納所より西向を登りふ士ニモ甚其地也  
沙亦十三年來於名即納所數七所かほり以下小金行毫を  
もつて之を目土ニキ及花鳥の繪りを少もと花鳥の  
間々ウキリ四字を即御庭の間也月花鳥の繪なり次  
又八字を賢人の間と云ふ新毫も一もあれやう仲條を  
寫せりあれ此の間ハ年を十二年あれ間止て沙八年來仙  
人名酒食鴻院焉れ候也于て其間沙の繪也

沙小十三年數西王母の繪也西の座姿には繪が一即縁  
二段後縁也二十四年數既而物主たる即納所より室八  
平坐の御座也以之柱數數合百四十字有三四重前  
画十二間繪ハ表上部毛笔虎の絵の繪也又十間行と墨  
行の間ヒ名符也さく十二年少ねと血とぬの間ヒ東八  
多數相ふ鳳凰の繪次八重小洋油平と庵ふらしヒ巢  
父牛を寄すく絵ア西賢のかくらびの佈までて山ふ  
きと画人其次小座敷七度を數繪は云々と金泥也ア  
引立て沙十二年來於前西二間の小室毛筆の本を画き

日終はあらん松風は山中本の序を寫す。山と空  
の間と古き日八角四方四間程なり。内外とも金色柱朱  
色内柱金扇あり。後よりは秋月の扇を脱びの次第十六扇子  
多圓は。而縁うる小佛多羅を画す。端板不動龕を画  
ひる。相應室諸形也。よされ七扇自三間四方。序座裏の内  
皆金泥也。外御も金泥也。四方の内柱不動龕障壇天  
井小天人通向の仲。馬頭。馬首。馬の内。後ハ玉皇  
多羅院門十哲帝の四納書の七賢等を画せる。後回織  
文也。起六十余階。金泥也。内外の柱櫛。漏斗。軒をさ  
せ。また其上壁龕也。又馬頭。馬首。馬の内。後ハ玉皇

と謂つべト

細工の如き

上一扇金具

後無年。扇形。扇面金具の上。手毛傳

二重圓

本教對阿弥金具也

序柱上棟梁

墨額入金門

小袖工序柱

多面處をも

漆師

首刑部

居鏡

唐人一觀主。仰付高良の者鏡

序多面清奉行

本村源房左門

墨山記文

ち十枚葉第一山毛松種四年白雲庵多志大師阿房殿  
歸後固於西石園居不度虞治天下必無持教人  
間蓬茅三万里仙境多無事に承保願

岐下沙門玄興拜稿

右は記は天堀寺御智院弟彦和尚ニ付せらるる御小弟次  
鋒限セトと鶴洲岐阜の勅化和尚(天命)にて可也之に  
をちやも再び候退有りと左に御領下寺所望有り  
故修ふ記せしと早以一院ふば記は天正六年丁丑の月  
立と云ふと之に深志退す自天正五年丁丑の月  
信長丹羽長秀をとめらひを修ふ本屬宗京清く覆

集傳(うきし)先傳(うきし)明智年記曰天正四年正月十日  
信長卿(おほきよ)波良(なみよし)と要害(あわせ)信乃(のぶな)  
て(と)ぬくと(と)目(め)安(あん)泰(たい)と見(み)まし所(ところ)名(な)と改(か)へ  
多く御(ご)事(こと)務(む)めり(推任)る守(まも)り(豈秀)ハ佐和(さわ)の主(おも)て  
身(み)の事(こと)と申(い)し多(おほ)く守(まも)り(豈秀)ハ佐和(さわ)の天守(てんじゆ)を  
之(の)假(あ)き(た)國(こく)防(ぼう)の山(さん)毛(も)松(まつ)と(と)て(と)御(ご)行(こう)く  
處(し)主(ぬし)可(べ)るや(や)く(と)て(と)山(さん)の(の)義(ぎ)馬(ま)う(う)角(かく)限(げん)右(う)手(て)設(せつ)候(う)

十間東西十七間うちサナ一間は材あと余り二人ひとぞ居す  
とちくに教信長は先秀則ち裏を先春たる時より、美木山  
城守行者同友元東仲毒木王計及龜井四天王又三清  
神真今筆あ反泰正三毛因陽守素船以下三河守後を安  
ち腰下さう向ふ勢田下山室吉化寺景隆寺田橋をま  
きニ居て陽氣あそへ因上小屋く明智ノ身あらかく  
毛トノ先安ら跡ふせ事と國きよ敵のけふと事と  
知つて病生よ三郎氏綱中の人々を見よと日節  
御小笠ノ六月一日明智石馬久先春安ら歿すと御下ふ  
先秀、少将の歿を聞て嘆く極く悲もく追也年後後  
し

曰織田信長天正四年正月參據於邊にあ云其將の條の  
同時添不立希小佐陽村折ノ後のあひるい也毛トノ先先  
毛元年秋キム月信長中川翁翁をとく妙也とすと  
いとち平様見之記すとて  
百人馬 様見寺下すとゆの格也

天祐社 劍清年慶石洋

觀音寺 わうハ百人馬を也と門入す山門の左右  
路見左あり

也見寺 もらふり百人馬を山門入す山門の左右  
山門の左右

ちの上ふ閑らう田廻間とまよひ知る事へかと覺  
者左右あ隠すも此の一大事を身に佛殿の内ふ信長が御  
所より御左の方ふ左至院殿贈三品羽林仙表不居主の画作  
を信長の圖るはど也御手の内ふ信長の徳の額也  
馬、侍郎、家臣也其馬へとく後へて一布角擇一布蛇帳  
一つへ其を身取て御也御謹解下候、つとままで事を  
直小持つゝせば手を掛けりと云手もと安らの度  
同ゆき御名の歴也と云手もと三法守輪田  
右明終の所は佛飯の東小野、齒守は信長立也と云  
輪基ハ正件別可と云禪仰も云信也信長招く位持也  
書ふて

近江輿地略卷之五十九

蒲生郡第六

觀音寺　觀音寺のゆゑに則て寺村の中也累徳記曰  
也は國石守村觀音寺者人王五百代推古天皇も駆鳥  
石を植て寺の序建三白石切十二石紅御藍と中其隨色  
あるものより恐れし像長三圓直仰也最是佛也西園收  
紀三十二事也世人芦浦は觀音寺と云又產浦の寺守  
村山内芦浦は蒲生也臣極芦浦觀音寺と云是も至る  
の御言寺と號する也別寺也也是も御の信傳もあ某を  
和と云ひて曰す原の平小人の毛並く立るとも曰甚矣矣

形乎どん面也やく多難也則言ひ都希望小殺生を御  
 割れの多難を而くらへと法也へば業小信と賣す事  
 有を失つて取はば聖者慈學をもろへぢよこれ小字  
 て何は、法を爲さん臭み云々にはおほく伽藍を建立  
 やうと盡像を安づらう。初恩若々を却く天上小生び  
 とある因縁今之のまこと更にもの像を刻ミ如色  
 あふ又七日の間俗名念佛べく彼が善れを弔ひるべ甚  
 海底の日天人降下するを行ひく細生天半支勝ゆ樂音  
 てく聖者即修力やく今、切引天子せざるおもてく拜  
 謝らむとく而ぞもく景きる傳習左多羅山に廻松志

宝栗平年既郡の瑞寺竟庭駕栗津余万石自承復  
 予年三十有一帝王近郊和法國十年矣而以國可後  
 曰爾生汝有物甚故如人狀人如更始矣ちる謂石在自渴  
 始手水又左麻庭三千五百推古天皇七年法國爾生汝有物  
 甚故如人裏毛鳴ち云大國故、傳書也不可用參書を  
 信せばす。かくかく

觀音場址

觀音寺の山號山号十八時淨了院故傳

觀音寺の山號山号十八時淨了院故傳

直主亨宇間はを胸に眼を十方うめも三国れども東  
征はて云國眼むかへてすすりとみゆつても三國石とく  
筆ふねは傳説は輕者事のかよひ相傳親者傳筆家  
の時は親者事よりあり傳説の後人の筆娘を  
と云三國の向とくとく役を連続た事もあひ事と有  
り事也云國は圓はく官三國云するのみうとふ  
経法院寺たる事多きと更に圓はく海也ち  
至極の事は其下今の事のことを徳川江戸も  
あらば通し石垣櫻井の傳也御外參政の事はあは  
あはれきとて幕すと申其後うち門の跡も馬の門

右追物在七曲山あらべか一乗峯の山の北の地の事  
石うぶかく山は清く陽くはるの氣を御すと仰多き  
義徳前後ちく大公年数四百有四年を度すと而承  
まく相続の事す認められぬ。然有るも理う正親  
町院永禄十一年五月信長勅昭公を仰て之日  
終ふせ候を攻め核す。義賢父の國を多く坐し、仍承  
秀義文治年中由は國かと佐木千人を率いて之の國を  
守り篤かれて一里半余河を掛山の浦を引びて居  
の間異かとて詔書經へまくかまうをもての義生の親

音寺の城と云ひてゐる所

石寺村 錫音寺山に聳む

信水農村 石寺村也あらう

箕作山

清水農村はあらうともサ直三メ間津裡

音山へ十町添ひ、北等取思ふ

古跡址 箕作山あらう 箕作城跡も是也

陽殿井 箕作山の麓小河、清泉も

少林寺 箕作山の麓小河、ある錫音少林肉食を盛

少林寺を相傳御祖音初兜の施庵と傳すも少林寺供

少林重盛公墓 少林寺の恩門もあらう

岩戸山 東毛萩村の北東小河、さ二子圓溝、一ノ割田

東毛萩村

清水農村のあ東あらう

福生寺

東毛萩村あらう 僧ちふ雲う唐敷院のまえ

源光明祐社

東毛萩村あらう 繼記をもじ一毫あらう其事

卑哩豆瀬也甚大畠を乞ふ白浪に圓ハ高天天皇の御

主地ねく御うしら大連と云者あらう 花火は夜祭れ

良木と稱す也思ふ事もあらう 老萩の事もあらう 日本武事記

秀と云は海上惡風冲浪も危うき事多の御事ふうふ

海中へ死んで、碧沉島へ歸る。而も老村をさう女分平  
產をもつてゐる。意が格別に爲り、入金すと金の額  
を改められ、奉ふる。云々の事は、老村の妻不  
理と金額や名づきと金の額のことで、車東経成  
の後自持する御内通と相談して、源太郎と改め  
る。赤大庫は百七十三年と傳ひ、源太郎と改め始める。  
久里浜には三千石町坤の方岩食山の集  
山洞と対する所で、たゞ梅の木と墨石記の碑にて信頃  
トガシ一連の式次が陽小所謂奥石神社也。

老蘇森

今其跡と云ふ。老蘇森西老蘇の岡山に於

て大糸吉は水を乞ひ、今の老蘇村と老蘇  
の家の跡である。老蘇森は老曾山と、筆者記によれば  
物語)丈木と、多岐枕等の是傳ゆる。

足利百首

あらわし

古面義和合

まこと

世々月をうかがひ、霜の月をうかがひ、  
つゝぬきうかがひ、三日移れり年をうかがひ、

五  
玉吟

魚隱

閑人す老者の事の御ふる所と云ひて六月の丁未  
日立くを爲はむやう、海修業凡もしく老後の事のりま

立法

西充養村 東充養のあ東から

東充守 西充養村の海を雲海教院のまちと

西生東村 西充養村東から海を雲海教院のまちと  
西生の郷すと今唱多の彈丸ば

西福寺

西生東村から海を雲海教院ます也

泡る地名矣 西生東村ゆけ石佛の地名を云ひ去  
佐相傳古此地小村井在行とも者ゆく姓ア河津と云

店をかゝる傍人を憩息すも或日一宿すがゆふる東町小  
息ひて少彼旅館仍ふ深く急暮の情を劫し旅宿の飲食  
あさぎりを兼ね奉ふる忽ち了るほ十月より男のと慶辰  
三年之後彼女得見る宿川やく方根とほん今の方根川  
縁ゆく彼門をあらわつて曰嗚呼不思議あり矣けふ  
か帰色絶え也と彼女おれを離す三年以來未嘗せぬ  
の旅宿あら女其ねを惜ふゆ了便寄りうきく其ふをか  
かか泡らもうく宿先近御と曰め西られ井と云ひ此池中  
かく石佛の地名ぢうれと當年此今の地名是也併へ居

おほれ也又アリとお井の名を改めて生末と言今  
西生末村先よりお井の地を移す事あつて御六  
経精の地也おほれの地を改して却くおほれ地也  
御一ノ井田御井地内従う栗を取る所を西生末村の地也  
多あはれ天地の間山都生胎生或印生れ敷けられ御  
代り後出生の命以て一統の茶人との理ゆゑ  
左生末村分西生末村の西生末村  
御所内村 左生末村は西生末村も併相合たる三條院  
寺はやまく松木村は先の日生年中までは中村  
号一五が終ふて甚廣貞觀年中惟高祖王號小  
御所内村  
かくすまに東山林木を改りて御所内村を名  
自和年中まことに林木改め由はれ御所内村を名すこれ  
より御所内村を名す今西生末村は御所内村を名すこれ  
皇子の御名もすまく御所内村を名す惟高祖王  
事御所内村を名す御所内村を名す惟高祖王  
多見御所内小倉三門寺跡あるとて高祖廟也御所内村  
御所内村を名す也高祖廟也御所内村を名す也御所内村  
武佑行文云詔達書曰唐安元年正月八日後先教第  
自國佑行文云詔達書曰唐安元年正月八日後先教第

地主は武佑院行義の御代り地めや武佑院主とく  
御代は主をもつておれ行義もあらう武佑院主とく  
智也を參第の都を連らまし保良の都の遺址あり  
氣を相あうと事務小進ちよも即ちもとゆけ後を  
まつて已今武佑院と名前称送す者不法便に懲除  
の事由を産門ふるん  
賀衣大明神社 印材あつて俗云一輪院是近八年  
勤清一 小野守と云  
出生大明神社 因材あつて俗云一輪院是近八年  
卯年三月十日野田村民陽慶と焉と云て材外  
は

かく田の字をそろふ古きふ像りられ其事す也是  
みは物は乞公室主御是則志蓋馬公の文弘國毛の  
あは方の墨あ佳とく汝うへゝ墨じへゝ則事く今  
其事を歩き山々唯奉うむ事大明神被石像の所  
圖を歩きてすい今ふ時田村の御主東方主と聞ゆ  
陰化うゝ事も七年被石像を手舞山高神社の像  
多至四十八の法光多破損すと甚因うゝ甚事ともあく  
は兩と立ちて其奥書ふ寛弘九年の八月とあると  
行持もふ浦小布施の事からて玉置島の御忌

んぢやあ卑きゝ美の事ふ本筋の事さうふ。べうわや

例風布化宣達を視念とし設けたる事あるべし

熙道齋  
因村寫

編者  
卷之五十九終

